

職人の技を受け継ぎ歴史・文化を継承する 金沢職人大学校だより

◆ 金沢職人大学校の役割と課題

金沢職人大学校は、元金沢市長山出保氏が、金沢市における伝統的建築技術の継承に危機感を抱き、各職種の熟達者と相談する中で、今ならまだ教える職人が居て間に合うと決断し、関連する職種別組合と一緒に1996年に設立したものです。

各職種別組合の推薦を受け、10年程度の経験を持つ職人が3年間、仕事と両立させながら熟達の先達から学んでいます。本年9月に本科9期生42名、修復専攻科8期生45名が修了すると、本科は420名、修復専攻科327名もの歴史的建造物のスペシャリストを育成することになります。ただし、修復専攻科修了生には本科修了生も多くいます。

職大のような研修施設は全国唯一のもので、しかもこれだけの修了生を輩出して来たことは特筆

すべきことで、地域の貴重な財産です。この存在を生かし、地域の歴史的建造物の修復、再生に着実についでいく必要があります。

しかし、工事自体は個別の経済的な契約行為であり、研修生やその研修成果が歴史的建造物の修復、再生に十分に活かされていない実態があります。市発注の業務であっても制度上の制約から修了生の活用を条件とすることができません。したがって、職大の役割を高めるには、修了生のマンパワーを存分に発揮する仕組みづくりが必要です。

また、全国の各地域における歴史的建造物の修復についての様々な取り組みと交流し、必要に応じて、それらを支援していくという役割も大切であると思われま。

(川上光彦)

漫画「金沢職人ばなし」の発行

職大について、市民の理解と関心をより深めてもらうため、漫画を制作しました。作者の坂上暁仁氏は、昨年取材のため当校を訪問。職人への尊敬と伝統技術の継承と後継者の育成事業に共感して頂き、当方より制作を依頼し、本年1月に漫画「金沢職人ばなし」を発行しました。

漫画では、金沢市の歴史と文化に興味を持つ青年が金澤町家や町並みを巡りながら、当校にたどり着き、その取り組みに興味を抱くという内容です。今後、本科9科の職人とその技を緻密な取材

に基づく精緻で丁寧な描写で紹介させて頂く予定です。ご期待ください。

当校のホームページでもご覧になることができます。

坂上氏は、福岡県生まれ。武蔵野美術大学卒。漫画家、イラストレーター。第71回ちばてつや賞入選。



市民公開講座

昨年10月2日(日)に開催、33名が参加。一般の方が職人の技と職人文化に触れることが出来る機会です。造園科では黒松の剪定や雪吊り、縄の結び方を体験しました。参加者は自分で道具を持参された方が多く、説明を聞き見るにより改めて職人の技に感嘆し、難しいことを肌で感じていたようでした。来年も参加したいと言う方もいました。



寒糊炊き

本年1月20日(金)の大寒の日に表具科の恒例行事として行われました。大寒の時期には井戸水等に雑菌が少ないために行われます。鶴来の白山比咩神社の地下水を汲んできたもので行われ、掛軸や巻物等の和紙で裏打ちする際に使われ、仕上がりがしなやかではがしても傷つきにくいそうです。当日は漫画家坂上暁仁さんも見学されました。



◆本科：第9期生(2020年10月入学)の研修内容

本科の9科計42名が、月1、2回、夜間や土日に研修しています!

石工科

ノミの道具焼きの研修です。石材を研ると先端が少しずつ丸くなるため、焼き入れ硬くして長持ちさせます。昭和50年頃までは毎朝行っていたようで、現在はタンガロイ金属等の硬い材質のものが使われるようになりあまり行わなくなったそうです。(鉄のノミは道具焼きをすることにより何回でも使える)。ノミの直しではコークスで約850度に保ちながら焼くそうです。



ノミの道具焼き

左官科

炉壇巻竹取付け、荒壁付けとイタリア磨きの授業を実施。炉壇の内側に竹、藁とすさの泥壁を6回塗り、中に空気をいれないように力を入れて塗るようで、なかなか大変な作業だそうです。イタリア磨きとは西洋建築で欠かせない大理石がイタリアでは多く産出されなかったため高価で、そのため漆喰工法で大理石に似せた伝統的な工法が生み出され、日本版に改良されたものです。



手前は炉壇巻竹取付け、荒壁付

大工科

丸太のひかり付け、がんじき合わせの授業をしていました。がんじき合わせとは、石の上に柱を立てることで、ひかり付けとは『ひかりも漏れない程に素材同士を密着させる』というところからきているそうです。自然石の礎石の形状に合わせて柱の下端を削り柱を立てます(石場建て)。研修生に話を聞くと、いろいろな技術や知識を教えてくださいたいと思っていますがついていくのにいっぱいだったとのことでした。



がんじき合せの様子

瓦科

本葺きの作業を実施。今後、鬼瓦のせ、棟積みを行います。研修生二人は遠方から来ていますが、大変真面目に授業に参加しており、次年度は修復専攻科も希望しています。

ただ現状の瓦業界は瓦を葺く家が少なくなり、瓦の本葺きの工事が一年に2回程しか無いそうで、無くなることは無いですが仕事量はピーク時の1/10になっているそうです。



本葺きの研修

造園科

本年2月に池田講師、村田講師と研修生5名で奈良・京都研修旅行を実施。寺社石造美術、材料店、寺社名園めぐりをしてきました。1日目は奈良県の氷室神社、東大寺法華堂、春日大社、石材店、2日目は京都の灯呂店、白沙村荘、大徳寺を見学しました。古い石造美術を中心に、天候にも恵まれ、とても良い勉強になったとのことでした。



白沙村荘で景石を見学

畳科

本年2月26日から27日に京都視察研修を1泊2日で行いました。1日目は東本願寺大寝殿・白書院、上徳寺、醍醐寺三宝院・理性院、2日目は創業大正8年、京都西陣織・金襴織元の株式会社 織り善、妙心寺玉鳳院等を見学。織り善では、今まで見たことの無かった絹の縁のサンプルを見せてもらい感動しました。

1日目は大変寒い日でしたが、貴重な楽しい経験になったそうです。



株式会社織り善の見学の様子

建具科

修了課題作品として両面舞良戸(りょうめんまいらど)のレブリカを製作していました。舞良戸とは舞良棧や舞良子を入れた板戸のことで、軽くて丈夫なので、寺院建築をはじめ一般的な日本家屋でも使われていました。研修生は熱心に講師の指導のもと、細かい作業を目の前で見てしっかり勉強していました。なお、当校にも金沢城ゆかりのものの可能性がある両面舞良戸が保管されています。



講師から学ぶ研修生

表具科

加賀市、勝光寺様の明治期に仏教関係専門の絵師によって書かれた涅槃図の修復にとりかかるところでした。穴が開いているところの修復や裏打ち、締め直しを今年7月までに実施するそうです。塗料の剥離を防ぐため、表面に薄く膠(にかわ、動物の皮等を原料とする、古来の接着剤)を塗るためにゴミや埃を刷毛で除去していました。結構、細かい作業で、私にはとてとても・・・・



刷毛によるゴミ、埃の除去作業

板金科

銅板による鬼を作製。通常の仕事では皆無で、今回の研修生の中には初めての方もいました。大変難しいようで叩き方の角度や力加減に皆さん苦労しているようでしたが、元々器用な方も多く久野講師の指導のもと、綺麗に丁寧に早く進んでいる方もいました。さすが職人技、同じものを作っても人それぞれによって趣が違い感動しました。完成まであと2ヶ月半かかるそうです。



鬼瓦を制作する研修

子どもマイスターズスクール

お茶教室を3月11日に市民芸術村にある里山の家で開催。教養講座講師の浅野宗史先生、西田木心先生の指導のもと、教室修了生の住田さんが着物を着て亭主を務め、現研修生の山崎、森下さんが手伝い、鷺山校長先生をはじめ、生徒9名、父兄を含む総勢27名で実施。作法を学び甘いお菓子をいただきお茶を楽しみました。皆さん正座に苦労、笑いの絶えないお茶会でした。



◆修復専攻科の研修概要

昨年10月から最終課題の修了研究に取り組んでいます。

市内にある歴史的建造物で保存修理の必要な石川県指定文化財大乘寺庫裡(くり)、金沢市指定保存建造物旧田上家住宅、金沢市駅西にある姉妹都市公園内の蘇州あずまやについて現地調査に取り組みました。研修生一人ひとりが、それぞれの建物の価値について考え、現況の劣化・破損に対する補修対策を検討しました。各自で考察したことを持ち寄って班メンバーと意見交換し、各建物の状況に見合った修理計画の構想を立てました。

1月からは希望する研究課題ごとにグループを編成し、最終課題に取り組みはじめました。気心の知れた班メンバーとはいえ、職種の異なる人たちと意思疎通を図ることは、決して容易なことではないことを学びました。

この他に、寶集寺(ほうしゅうじ)大仏殿の文化財的価値を踏まえた修理方針の提案、失われたチャン塗り・手打ちによる金箔製造技術の復元考証、所蔵する舞良戸(まいらど)・手縫い畳床の解体調査に基づく伝統技法の研究、天徳院山門の軒廻りの模型製作を通じた寺社建築技術の研究と、それぞれ選択したテーマで修得した技術の研鑽に励みます。

研究成果は8月末の調査報告会で発表。保存修理の専門家等のご指導を踏まえた上で、所有者等への説明を行う予定です。



大乘寺での古文書調査の様子

村井千世墓石廟の保存修理

2016年から2021年にかけて、野田山の国史跡加賀藩主前田家墓所にある村井千世墓石廟の保存修理



千世墓石廟の全景

事業に石工・建築士の歴史的建造物修復士が携わりました。

村井千世は前田利家と正室まつとの7女で1580年(天正8)に生まれ、1641年(寛永18)に62歳で亡くなりました。その墳墓は墓所の南西端にあります。

ほぼ正方形に土を盛り上げた墳墓の前面に祭祀を行う祭壇部があり、この祭壇部の上に石廟が建ち、内部に宝篋印塔(ほうきょういんとう)が安置されていました。使われた材料は笏谷石(しゃくだにいし)で、石造りの柱や梁等を木造と同じように積み上げ、石造りの屋根が掛けられています。

2007年の能登半島地震で屋根石が落下する等の被害を被ったため、石廟を解体して修復することになりました。各石材は保存処理され、傷んだ箇所は修復し、失われた石材は復元しました。調査の過程で石廟を形づくる部材の中には笏谷石以外の石材が使われていることが判明し、現況の石廟は全ての部材を解きほぐして修理されていることが分かりました。

修復技術を修得した歴史的建造物修復士が、金沢市職員と協働で業務に携わり、当校として初めて国史跡の保存修理に取り組みました。その一連の成果は、金沢市文化財紀要340「史跡加賀藩主前田家墓所整備工事報告書Ⅰ」として刊行されました。

【編集後記】

コロナ禍も終焉しつつあり、本校の研修も従前のように行われるようになって来ました。本号でも、研修の一環として視察された様子を報告しています。本校の特色である、熟達者から未経験者に見せて体験して技を修得、また先行事例などを視察して見聞を深めることは大切です。そこではインターネット等では得られない、大切なものがあります。単なる技術だけではなく、人と人との人格的なふれあいによる得難い好影響があると確信しています。(M.K.)

修了生の紹介／武苗裕之氏

武苗氏(63歳)は家業の瓦店を27歳で5代目として継がれた。瓦専業。本科4期、修復専攻科4期修了。組合の技術委員長を、9期から本科講師を務める。兼六元町松山寺、旧蛤町妙慶寺などの修復を手掛けられた。歴史的建築物は手間がかかるとのこと。



瓦を銅線で留めたり、ステンレスの釘留めなどは、雪対策もあり北陸特有ではないかとのこと。昔は3人体制であったが、今は2人で取り組まれる。30歳程度までに瓦職人としての体づくりが必要で、息子さんが修行中とのこと。

講師(表具科)紹介 いそ磯慶太郎氏

組合からの推薦で当校の本科4期・6期、修福専攻科6期を経て、現在当校の講師として活躍、授業時には車で片道1時間



半かけて七尾から来ています。奥様は金沢で竹芸芸をされており夫婦で展示会もしています。

業歴30年、祖父が創業し3代目として継ぎましたが、はじめはイヤでイヤで仕方なかったそうです。しかし、現在48歳の年齢になって面白さが分かってきて、やってきて良かったと思っています。趣味は映画観賞、好きな食べ物はビールで刺身を食べることで、キノコ類は大の苦手だそうです。

「金沢職人大学校だより」No.07、2023年3月

【発行・問合せ先】

公益社団法人 金沢職人大学校
住所：金沢市大和町1番1号
(金沢市民芸術村の一角にあります。)

Tel 076-265-8311

Fax 076-225-8314

Webサイト <http://www.k-syokudai.jp/>

事務局：平日9:00~17:00、土日・祝日休み

